

負けが私を栄光へと導いてくれた

今年六月に将棋界を現役引退した加藤一二三九段は、長くトップ棋士として活躍し、多くの偉業を成し遂げてきた。その活躍を支えてきた勝負哲学とは――

勝負の厳しさを知り抜いた、「神武以来の天才」

七七歳の加藤一二三さんは現役引退後も、「ひふみん」の愛称で親しまれ、トークバラエティー番組などで活躍している。その明るく楽しいキャラクターとは裏腹に、棋士として長年厳しい世界で生き抜いてきた「勝負師」でもある。そのキャリアは輝かしい栄光に満ちている。

一九五四(昭和29)年、一四歳七カ月にして、当時史上最年少でプロ棋士としてデビュー。この記録は、二〇一六(平成28)年九月に藤井聡太棋士が一四歳二カ月でプロデビューするまで破られなかった。また、デビュー後四年連続で昇級し、一八歳にしてA級八段に昇段。「神武以来の天才」と称賛された。この最年少昇段

記録は、いまでも破られていない。

その後も、名人・十段・王位・棋王・王将と計八期のタイトルを獲得するなど、華々しい棋士人生を歩む。そして、今年六月に現役引退するまでの六二年一〇カ

月で、公式戦二五〇五局を戦い、一三三四勝(歴代三位)二二八〇敗(歴代最多)の大記録を打ち立てた。

プロの勝負の世界の厳しさを、加藤さんほど知り抜いている人は他にいまい。幾多の勝負を積み重ねてきた加藤さんは、自身の勝負哲学を次のように語る。

「いちばん強く心に残っている勝負を一つだけ挙げるとすれば、やはり、一九六〇(昭和35)年に二〇歳でタイトル初挑戦したときのことですね。大山康晴名人との七番勝負でした。

私は一勝四敗で負けたのですが、その直後に大山先生が、「加藤さんにはいずれ負けられる日が来るだろう」

昇段に大きく関わる順位戦の基本的な仕組み



日本将棋連盟のホームページを参考に編集部で作成

とおっしゃったのです。私自身は大差があつての完敗だと思っていたのですが、後で七番勝負の棋譜を詳しく検討してみると、内容的に、かなり大山先生に肉薄できていたのです。そのことに気づいて、私は大きな自信を得ました」

B級陥落という「最初の挫折」から学んだこと

弱冠二〇歳にして名人位に挑戦するという檜舞台に立った加藤さんだが、その翌年にはA級からB級に陥